

おおさか

KEYワード

第
82
回失われた懐かしき情景 ジョッキ片手にビアガーデンで物見台を思う
夕涼み、むかしの夏のしのぎ方

夏はビールが美味しい。灼熱の日中の仕事を終えての夕暮れ、涼しいところで一息ついて飲む最初の一杯が爽快だ。むかしは大阪で夏のビールといえば、百貨店やビルの屋上に設けられたビアガーデンで、大きなジョッキを仲間と傾けるのが楽しみだった。

日本で最初に屋外でビアガーデンを開いたのは、明治時代の横浜だそうだが、日本初の屋上ビアガーデンは、大阪駅前にオープンした「アサヒビアガーデン」(ニユートーキョー経営)とされる。場所は、昭和28(1953)年5月に竣工した大阪第一生命ビルである(現在は平成の建築)。屋上で開催されたオートバイ展示会で生ビールを出したら好評で、本式のビアガーデンが誕生したらしい。

旧大阪第一生命ビルは、高さ制限が31mで当時の建築基準法に例外規定を適用し、12階建、高さ40.75m。開業当時、日本一の高層建築であった。二代目通天閣の誕生は5年後だし、戦前からの阪急百貨店は8階建である。日本一の高層建築に出来た日本初の屋上ビアガーデン。遮る高層建築も少なく、夕風も通って涼しかっただろう。そういえば、日本一の高さのあべのハルカスにもビアガーデンがあるようだ。

では、それ以前、大阪の都心ではどんな避暑の仕方があったのだろう。よく知られるのが、中之島や大川での夕涼みである。夕方に橋の上で川風にあたり、屋形船で涼をとるのである。

家から一步も出ない涼み方もあった。屋根にある物干し台での納涼である。大阪で思春期を過ごした版画家の織田一磨(1882~1956)は、「物干台生活」と呼んでその楽しみを次のように語る。

大阪市中は人家極めて密接している。従って庭園等も先づ無い方が普通の有様である。植物の培養等も総べて屋上に建てる。大阪市中人家の物干台生活もその特色の一つである。写生の材料も従って屋上に迄在る事になる。夏の

大阪市立住まいのミュージアム 常設展示模型「北船場 昭和7年」より



市電が見える物見台



物干し台から一気に伸びる物見台

夕べ屋上の納涼も大阪の生活の面白味と云へよう。「大阪の写生地(二)」大正5(1916)年

船場の大きな商家などでは、さらに「物干し台」の上の屋根に「物見台」が設けられた。火事など災害時の監視台であるとともに、夏の避暑に用いられた。天神橋筋の大阪くらしの今昔館(大阪市立住まいのミュージアム)に展示された船場市街の模型にも「物見台」が再現されている。

6月号で紹介の北野恒富(1880~1947)の大回顧展に出品された《星(夕空)》(大阪市立美術館所蔵、昭和14(1939)年)も、「物見台」を描いた大阪らしい詩情に富んだ作品である。(表紙参照)

女性が夕空を見上げている。視線の先には、七夕の星が瞬くのか、打ち上げ花火か、想像してしまうが、問題は女性が立つ場所である。もたれているのは建物の手摺りにも見えるし、橋の欄干にも見える。

それが疑問だったが、同図の天下絵(大阪新美術館建設準備室所蔵)が発見され、絵の舞台が明らかになった。天下絵には、完成作では省略された屋根瓦が描きこまれ、物見台であることがわかったのである。大阪の“郷土芸術”を模索した恒富もまた、夏の風物詩である「物見台」をとりあげ、大阪の特色ある生活や都市文化を表そうとした。

松屋町界隈に建つわが家にも物干し台がある。20年前は、ここで夕涼みしながら友だちとビールが飲めたのに、最近では周囲をマンションに囲まれ、風は通らず、室外機の熱気で暑いこと限り無し。

物干し台の家庭ビアガーデンは、いつの間にか灼熱地獄のサウナとなり、熱暑に酷暑の拷問台となる。今年も熱中症にはご注意下さい……

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の幻像」(創元社)など。